

when / while が加えられた分詞構文について

文学研究科英文学専攻博士後期課程満期退学

出縄 貴良

0. はじめに

分詞構文について、学校英文法ではしばしば、従属接続詞を用いた文からの書き換えで説明がなされる。従属接続詞を消去し、従属節の主語が主節の主語と同じであればこれも消去し、従属節の動詞を現在分詞にするというものである。このため、分詞構文句は、when, if, because, though といった接続詞を補った従属節と書き換え可能であるとされる。

(a) **Seeing** (= when he saw) *me*, Tom waved his hand.

〈私を見ると、トムは手を振った。〉

(b) **Being** (= As he was) *tired*, he sat down to rest.

〈彼は疲れていたので、休むために腰を下ろした。〉

(安井 (1996: 232-233))

また一方で、分詞構文句の前に接続詞が残されることもある。安藤 (2005: 245) は、「分詞構文の意味は、接続詞を用いず、ただ論理的推論にのみ頼って意味解釈しなければならない以上、ときにあいまいである。そこで、意味が不明確になりすぎる場合は、分詞の前に when, while, though, once などの接続詞を付けて文意を明確にすることがある」と述べ、以下の例を挙げている。

(c) **While** (= I was) **reading**, I fell asleep.

(読書しているうちに寝入ってしまった)

(d) **Though** (= Though I am) **living next door**, I seldom see Susan.

(隣に住んでいるのに、めったにスーザンに会わない)

(e) **When writing** (= When I write/ *When I am writing) *English*, I often consult the dictionary.

(私は英語を書くとき、よく辞書を引く)

しかし、ここで疑問が浮かぶ。果たして (c) ~ (e) の例文は接続詞がないと「意味が不明確になりすぎる」だろうか。接続詞がなくても、与えられた日本語訳に近い解釈が可能なように思える。もし不明確すぎるというのであれば、どのような誤解釈が生じてしまうかを示した方が親切である (江川 (1991: 346) には一例だけ、「理由」の意味に解釈されないようにwhileが添加されたという説明がある)。安藤 (2005: 244) は同時に、「また、ときには...」[時]と「理由」の二とおりにあいまいな場合も生じる。むしろ、あいまい性が分詞節の特徴であると言ってもよい」とも述べており、「意味が不明確になりすぎる」という説明だけでは不十分なように思われる。その他の文法書においても、分詞構文に接続詞が残ることについて、ほとんど説明がされていない。括弧内の日本語訳は筆者による。

(A) 接続詞を加えた例 接続詞を加えたものとも見られるし、接続詞と分詞との間の「主語+be動詞」の省略とみることもできる。

(江川 (1991: 345))

(B) You can use ‘-ing’ forms after some subordinating conjunctions, with no subject or auxiliary.

(いくつかの従属接続詞の後では、主語と助動詞を用いず‘-ing’形をつかうことができる。)

(Sinclair (1990: 584))

(C) *-ing* clauses can be used after many conjunctions and prepositions.

(-ing節は多くの接続詞や前置詞の後で用いることができる。)

(Swan (2005: 384))

また、これまでの説明からだ、接続詞がないと意味が不明確すぎると話者が判断したために、接続詞が加えられたことになる。つまり接続詞を加えるかどうかは任意であり、正確な意味解釈を求めなければ、接続詞を加えなくてよいということである。果たしてそうだろうか。

以上のことを踏まえ、実際の例文を見ながら考察していき、意味を明確にするためだけではなく、特定の意味を表すためには接続詞を加えなければならないことがあるということの記述を試みたい。例文は全てBritish National Corpus (BNC) からのものであり、括弧内の日本語訳・下線・太字は筆者によるものである。

(A) にもあるが、「接続詞+現在分詞」の形をしていても、従属節の主語とbe動詞が省略されて「接続詞+現在分詞」の形になったものと、分詞構文に接続詞が加えられて「接続詞

+現在分詞」の形になったものとを区別している文法書もある。しかし本稿では、これらを区別する必要性が現時点ではないと考える。いずれの場合も分詞構文に書き換えることが可能であるとされているからである。

1. 分詞構文の基本的意味

早瀬（2002）は現在分詞構文の基本的意味を〈同時性〉としており、分詞構文は多様な意味を持ち得るが、そのどれにも適用できるとしている。

現在分詞を用いた分詞構文は、時間的な意味を持つものと非時間的な意味を持つものに大きく二分される...いずれの場合でも、分詞構文の持つ基本的意味である〈同時性〉が保持されている。つまり、スキーマ的な意味<同時性>を満たしつつ、その適用されるドメインが時間的なものの場合と、あるいは非時間的なものの場合とが見られることになる。このように適用されるドメインが変わるドメインシフトにより、分詞構文の多義性が生まれてくるものと考えられる。

（早瀬（2002: 153））

本稿ではこの考えを支持し、分詞構文の基本的意味を<同時性>であるとして考察を進めていく。そして、接続詞が加えられている場合との比較を行う。

BNCで「接続詞+現在分詞」を200例ランダム検索すると表1のようになった。分詞構文の前に加えられる接続詞はwhenとwhile（whilst）が8割以上を占めたことになる。そこで本稿では、分詞構文にwhenとwhileが加えられたケースに焦点を当てる。まずはwhenが加えられた文について考えてみたい。

表1.

接続詞	数	%
while/whilst	87	43.5%
when	84	42.0%
although/though	15	7.5%
if	11	5.5%
because	2	1.0%
whether	1	0.5%
合計	200	100

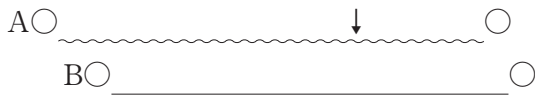
2. when+分詞構文

先に述べた通り、分詞構文の基本的な意味は<同時性>である。それはつまり、日本語でいうところの「～しながら」にあたり、分詞句だけを切り取って考えれば「まさに～して

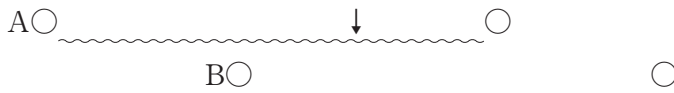
(いる)」ということになる。これを表しているのが図1である。Aが分詞句、Bが主節である。分詞構文は、(i)のようにAとBの重なっている期間中のどこか一点に焦点が当たっている(図中の↓)。(ii)のようにBの発生時が遅くなっても変わりはない。しかし、Bの発生時がAの終了時まで遅くなると「AしてB (Aした瞬間B)」という日本語が与えられる (iii)。この場合も、主節との時間的な隔たりはなく、「まさに～して (いる)」という概念は残る。(i)と (iii) では日本語に訳すと違いがあるが、ある瞬間に焦点が当たっているという点で、同じ概念を表している。

図1. 分詞構文の基本的な概念 (A ing ～, B ー)

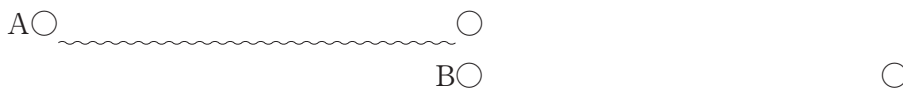
(i) 「AしながらB」



(ii) 「AしながらB」



(iii) 「AしてB (Aした瞬間B)」



このように、分詞構文はその瞬間に焦点が当てられることになり、反復的・習慣的なできごとを表すには不向きである。

しかし、分詞構文にwhenが加えられた文では、反復や習慣を表していると考えられるものが見られる。

(1) People often ask me, 'Hugo, why is it that **when dining** with royalty, you always keep your hat on?'

(人々はよく僕にたずねるんだ。「ヒューゴー、君が王族と食事する時に、いつも帽子を被ったままなのはなぜだい」って。)

(2) Mark always experienced the same feelings of contentment **when entering** the home straight.

(マークは最終行程に入ると、いつも同じ満足感を体験した。)

(3) I always experience a pleasurable thrill **when travelling** along Glen Shiel.

(私はグレン・シール沿いを進むと、いつも心地よいスリルを感じる。)

(4) Use hardwood if possible because it is less likely to deflect under load, but a

softwood bar is usually adequate **when dealing** with short lengths.

(可能であれば硬材を使ってください。なぜなら、重荷で歪む可能性がより低いからです。しかし、ちょっとした長さに対応する際には、軟材がたいてい適切です。)

(1) ~ (3) では主節にalwaysが、(3) では主節にusuallyが用いられており、文章全体が瞬間的なことではなく、反復的・習慣的なことを表している。ここで接続詞が加えられているのは、接続詞がないと意味が曖昧になるということではなく、分詞構文の<同時性>とこの反復的なできごととの相性がよくないためであると考えられる。従って、この場合の接続詞は曖昧性を回避するためではなく、文意から必要なものであると主張したい。

分詞構文は<同時性>が基本的な意味であるから、その瞬間に焦点が当たっているのに対して、whenが加わると、上述したように反復的なできごとを示すことができる。これはalwaysのような語が主節になくても当てはまることである。訳の上では「~する時は」で問題ないが、そこには「~する時にはいつでも」という意味が含まれている。

(5a) **When choosing** a shape consider any pattern on your fabric and select a shape to blend with the design.

(形状を選ぶ時には (いつでも)、生地の様をどれでも考え、デザインに調和する形状を選びなさい。)

(5b) **Choosing** his words with particular deliberation he said….

(特に慎重に言葉を選んで、彼は言った…。)

(6a) However, **when writing** essays it is not good style to continue this habit.

(しかしながら、エッセイを書く時には (いつでも)、この習慣を続けるのは良いやり方ではない。)

(6b) **Writing** in the British Medical Journal recently, she points out that between a quarter and a third of 15-year-olds smoke.

(最近、医学界会報で書いた際に、彼女は15歳の4分の1から3分の1が喫煙をしていると指摘している。)

(7a) **When working** on a paper-round, don't accept invitations into stranger's homes or accept lifts.

(新聞配達をする時には (いつでも)、見知らぬ人の家への招待に応じたり、乗せてもらってはいけない。)

(7b) **Working** swiftly, in quite a short time he filled the case, which he then snapped shut.

(彼は素早く働いて、相当短い時間で箱に詰め、それからパチンと閉めた。)

このように分詞構文の基本的な意味が<同時性>であるのに対して、whenが加えられると、<反復性・習慣性>の意味を持つ場合が見られる。

従って、確かに、瞬間的なことではなく、反復的なことであるということを明確に表すために、whenが加えられることもあるだろうが、(1)～(4)のような場合には、文の意味上whenを加えなければならないと考える。

3. while+分詞構文

次に分詞構文にwhileが加えられた形を考える。分詞構文の基本訳が「～しながら」であると述べたが、whileが加わった場合は「～する/している間」になるだろうか。一見した所、これら二つの間に大きな違いはないように思われる。なおここでは、whilstもwhileと同様に扱う。

(8) In the early 1920s, **while working** as a bilingual secretary in Westminster, she spent her spare time training in the Thames to become a long-distance swimmer...

(1920年代前半に、ウェストミンスターで二カ国語を話せる事務員として働いている間に、彼女は長距離の水泳選手になるために空き時間をテムズ川でのトレーニングに充てた…。)

(9) In other words, something like one-fifth of Ph D (*sic*) researchers read other theses **whilst carrying** out their own research.

(言い換えれば、博士号取得の研究者のうちの約5分の1が、自身の研究を行っている間に、他の論文を読んでいるということである。)

これら(8)と(9)の例文のwhile+分詞構文の部分の訳を「～しながら」に変えても、日本語訳としては特に問題ないであろう。では、文意を明確にするために接続詞が加えられるということであれば、なぜwhileが加えられたのであろうか。それは分詞構文が瞬間的なことを表すのに対して、whileを加えることで時間的な幅を表すことができるからであると考えられる。そして、時間的な幅を持たせることで、whenの所でも述べたが、主節の内容が繰り返し行われたという解釈が可能になる。これが、whileが加えられた理由である。この場合確かに、文意を明確にするためにwhileが加えられたと考えてよいであろう。しかし、ここで注意しておきたいのは、「理由」や「条件」などのその他の意味で誤解されないように、whileが加えられたわけではないということである。分詞構文の<同時性>ではないということを示すためにwhileが加えられている。

更にwhileが加えられた文を見ていくと、ある共通の特徴を持っていることに気が付く。

- (10) Septimus Hird, 17, who ironically lived in the Green Tree Inn, Skinnergate, won but before his design was built he drowned **while bathing** at Redcar.

(17歳のセプティマス・ハードは、皮肉にもスキナーゲイトのグリーン・ツリー宿で暮らしており、コンテストで勝利したが、彼の設計が建てられる前に、レッドカーで水泳中に溺死した。)

- (11) Catherine Tomlins, 15, and her 12-year-old brother James suffocated **while sleeping** in their fume-filled cabin.

(15歳のキャサリン・トムリンスと12歳の弟ジェームズは、煙が充満する小屋で眠っている最中に窒息死した。)

- (12) Her misery was made far worse two weeks later, when her motor-racing fiancé, Peter Revson, 34, was killed in a crash **while practising** for the South African Grand Prix.

(彼女の不幸は2週間後はるかにひどいものとなった。モーターレーサーの婚約者ピーター・レブソン34歳が、南アフリカグランプリに向けての練習中に事故で亡くなったのだ。)

(10) ~ (12) に共通することは、分詞構文の主語にあたる人物が何らかの形で亡くなっているということである。while+分詞構文の形ではこのような文が見受けられた。この場合もwhile句は時間的な幅を表してはいる。しかし、「~しながら」と訳すと、程度の差こそあれ、不自然な日本語になる。よって (8) や (9) のwhileと (10) ~ (12) のwhileは異なった側面を持っていると考えた方がよさそうである。

図2. while+分詞構文の基本的な概念 (while A ing ~, B —)

- (iv) 「Aしている間にB」

A○ ~~~~~ ○

B○ _____ ○

- (v) 「Aしている最中にB」

A○ ~~~~~

B○

(8) や (9) を表したのが (iv) である。全体として時間的な幅のあるものと捉えている。そして (10) ~ (12) を表したのが (v) である。AからBに移っているという点では、分詞構文の (iii) と似た形となっている。しかし、分詞構文はAからBへスムーズに流れてい

き、全体として一連のできごとと考えられるのに対して、while+分詞構文の場合は、AがBの発生によって終わっていることが大きな違いである。

(13) I get out of the car. The wind picks me up and pushes me in front of it like an irate mother with a naughty child... **Looking** back, I can see one of the porters grappling with the car door.

(私は車から降りる。風が、言うことを聞かない子供に怒った母親のように、車の前で私を持ち上げ、押してくる…。振り返ると、ポーターの一人が車のドアをなかなか閉められずにいるのが見える。)

(13) のように、振り返ると何かが見えるというのは自然なことである。当然、何かが見えたことで振り返ることが遮られたわけでもない。一方で、(10) ~ (12) はそれぞれ、「泳ぐ」、「眠る」、「練習する」という行為が死によって終わらされている。また、これら3つの行為から死という流れを当然とみなすこともできない。

もちろんこれは死に限ったことではない。

(14) A pan had caught fire after he fell asleep **while cooking** a late-night snack.

(鍋は、彼が簡単な夜食を作っている最中に眠ってしまい、その後発火した。)

(15) It [= The pony] had fallen backwards into the narrow eight-foot-deep pipe **while grazing** at night.

(そのポニーは夜草を食べている最中に後ろに倒れ、狭い8フィートの深さのパイプに落ちてしまった。)

(16) The day before, **while driving** his car, he had been stopped and charged with some trivial traffic offence.

(前日、彼は車を運転していると、止められ、些細な交通違反をとられた。)

(14) では、眠ってしまうことで「料理をする」という行為が、(15) では落ちてしまうことで「草を食べる」という行為が終わってしまっている。これらに比べて、(16) では”had been stopped” からも分かるように、運転が一時的にしろ止まっている。逆に (17) の場合は、「運転する」という行為は終わっていないので、分詞構文にwhileが加えられていない。

(17) **Driving** back she scanned the fields, the forestry, the ditches at the sides of the road, anything but Leon Kennedy.

(車で帰りながら、彼女は野原や森林や道路脇の溝といったレオン・ケネディー以外

のものは何でもくまなく見た。)

以上のことから、(14) ~ (16) のようなwhileが加えられたものと、(17) のような分詞構文は区別すべきである。分詞構文が<同時性>を表すのに対して、whileが加えられることで、同時には成り立たない現象をつなぐことができている。従って、この場合のwhileは「意味が不明確すぎる」ために加えられたのではなく、文を成立させるために必要なものであると考える。

そして、whileのこの同時には成り立たないことをつなぐという機能によって、「~だけれども」という譲歩の意味も表されるのであろう。「~の間」という期間と「~だけれども」という譲歩では、一見したところ関係がないように思われるが、このように考えれば納得がいくのではないだろうか。

(18) We will abolish tax relief for private health insurance, **whilst protecting** the rights of existing policy-holders.

(現在の保険加入者の権利は守るけれど、民間の健康保険の減税は廃止します。)

(19) **While denying** that he would be merely a stopgap premier, Goh nevertheless stated in December 1989 that “ it is obvious that Lee Hsien Loong will be after me”.

(ゴーは、自身が単にその場しのぎの首相であるということを否定したけれども、それにもかかわらず1989年12月に、「リー・シェンロンが私の次の首相になるのは明らかである」と述べた。)

(20) Some local parents were complaining that teachers correct some wrong spellings, **while leaving** the majority untouched, so as not to upset the child.

(地元の親たちの中には、教師が子供を混乱させないために大部分は注意しないのに、いくつかのスペルミスは正すと不満を言っていたものもいた。)

では、この場合はなぜwhileが加えられたのであろうか。これに関しては、譲歩を表す分詞構文の例がまだ十分集まっておらず、詳しい研究は今後の課題としたい。現時点では、譲歩を表すマーカーとしてwhileが加えられていると考えている。

(21) **Admitting** this, it might nevertheless be claimed that a person’s consenting entails, as a matter of the meaning of ‘consent’, not only that he acted in the way I have described, but that his action has the purported normative consequences.

(これを認めるにしても、やはり人が承諾するということは、「承諾」の意味の問題

として、私が記述した形でその人がふるまったということだけでなく、その人の行為が規範的な結果だとされるものを有するということを意味すると主張できるかもしれない。)

- (22) **Admitting** this, Terman and Oden comment as follows: The above comparison articulates two, related, conclusions that can be drawn from the evidence reviewed so far.

(これを認めて、ターマンとオーデンは次のようにコメントしている。上記の比較は、ここまで見直してきた証拠から下すことのできる二つの関連した結論をはっきりと示している。)

(21) では、主節にneverthelessがあるために譲歩として理解しやすくなっている。一方で、(22) の場合は特にneverthelessのようなマーカーがないので順接的に理解するのが自然である。順接的に文意を理解するのと比べて、逆説的に理解するには負担がかかるため、このようなマーカーによって理解を補助しているのではないだろうか。マーカーとしては、neverthelessの他にstillも挙げられる。この場合のwhileもマーカーとしての働きをしており、文意を明確にするために加えられたと考えられそうである。

4. おわりに

分詞構文に接続詞whenとwhileが加えられた場合について考察してきた。分詞構文の基本的な意味が<同時性>であるという考えを支持し、文法書で記述される「意味が不明確すぎる」場合には接続詞が加えられることがあるということを再考した。結果として、それぞれの接続詞は、分詞構文だけでは表せない意味を持っており、その意味を表すために必然的に加えられたものであると述べた。それは、反復的なことを表すにはwhenが必要であるということと、主節のできごとによって分詞構文の内容が終わらされてしまう場合にはwhileが必要であるということである。また、意味を明確にするためにこれらの接続詞が加えられていることはあるが、それは主に分詞構文の〈同時性〉と区別するためであり、他の接続詞との区別のためではないという論を展開した。

参考文献

- Declerck, Renaat. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. 東京: 開拓社. 1991.
- Poutsma, Hendrik. *The infinitive, the gerund and the participles of the English verb*. Groningen: P. Noordhoff. 1923
- Sinclair, John. *Collins COBUILD English grammar*. London: Harper Collins. 1990.
- Swan, Michael. *Practical English Usage. 3rd ed.* Oxford: Oxford UP. 2005.

Quirk, Randolph et al. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman. 1985.

乾亮一. 『英文法シリーズ15 分詞・動名詞』 東京: 研究社. 1954.

江川泰一郎. 『英文法解説 - 改訂三版 -』 東京: 金子書房. 1991.

杉山忠一. 『英文法詳解』 東京: 学習研究社. 1988.

早瀬尚子. 『英語構文のカテゴリー形成 認知言語学の視点から』 東京: 勁草社. 2002.

安井稔. 『英文法総覧』 東京: 開拓社. 1996.

山岡實. 『分詞句の談話分析—意識の表現技法としての考察—』 東京: 英宝社. 2005.

コーパス

British National Corpus (BNC) <<http://corpus.byu.edu/bnc/>>

On Participial Constructions Preceded by *When* or *While*

DENAWA, Takayoshi

The purpose of this paper is to examine participial constructions accompanied by *when* or *while* as compared with ordinary participial constructions without these conjunctions.

Few explanations are given on participial constructions with conjunctions. Some grammarians observe that, when the meaning which participial constructions show is ambiguous, some subordinating conjunctions are used before them.

The present writer agrees with the idea that the basic meaning of participial constructions is “simultaneity” and argues that conjunctions are used so as not only to avoid ambiguity but to express additional meanings, and thus the conjunctions may not be omitted.